



經曲餘師

孝經之部

全

口 11
2047
32



門口 11
番 2.047
卷 32

讀岐溪百年先生述

必 翻 究 列

經 典
餘 師

孝經之部 全

四書既_レ世_レ今又此經_レ板と
五經小學武經七書等皆先生の解_レ也
神_レ也人事_レを其_レの_レ

浪華事林 鶴堂藏

經典餘師孝經

凡例附言

○聖王_レの道とハ天下國家を治_レる_レ一己_レの

身_レ行状を脩_レる_レの道_レ中_レる_レ人の上_レてハえ

ようゆ_レせ_レる_レ古_レ人の詞_レも胸中_レに

志_レく_レて徒_レ位_レも_レハ宮殿の内_レ塵器_レとてあ_レる

り_レ異_レな_レる_レ斯_レ道_レを難_レの_レ様_レと_レ思_レふ_レハ

洋書館蔵

元来漢字小して言葉の異なりなるがゆへあり今經典
餘師二十五卷をわらわらけりてさうしゆまじりしむ
能く讀法の趣考ぐ合まじりての雪れどくちうしを

○讀法 よきうて

○おもとくハ本文ニ揚名於後世とあるは上段の讀法
ニ名を後世ニ揚てとよむべしとありそのどく字策
を以て字を撞て跡へかりよむべし、
扱讀法の文字の

間あひだよとよむと一かきハ上の文字ニ附てよむべし又一字の

訓終しりぞまどぐハその字をつきて次の字へつゞくはたへハ

名をとよむうちハ字策を以て名の字をつきて動うごじ

後世こうせいとよむ出いととて後の字へつゞく、又後世こうせいふとふと

よむ内ハ世の字と撞て動うごじりよむ、揚あのあとよむ出いと

時揚ときあの字をつゞく子細こさいハ上の字れよとちまうしと

下の字へ附てよむ時ときハつゞくもその文字もをよむと

是ゆる事ことたろらざるらがらめめたろら

一字の訓ことばハ一字の傍かたはらにつけつけけかりりるるはは志こころををききどどもも〇

於こゝの字ことば矣やの字ことばハ助字すけごころとて讀よむむるるたろら依よてて矣や

ををりりとと置おききありり、禾こめ女にととハ四書しよしよの餘師よし又また出いでで

置おききられればばつつままやくくくく倚よりりぬぬかかややりりててむむととりり字ことば〇

ハ儒師にうしももちちああぶぶ又また異ことなるるととふふくくとと心得こころえべべしし

凡例終

〇



後名ヲ
諸名ハ
別名ヲ

讀法

孝經
開宗明誼の章
第一

仲尼問居曾子
待坐を

子曰まはくことことこ
以下い下げの
例れいなりなり
參先王至德要道
有ありりてて天下てんかにに訓しめめ
民用みんてて和睦わくふく！
上下じやうげ怨うらむむ亡なしし女に

孝經餘師

溪百年講述

溪氏譯

開宗明誼章第一

此篇ハ孝道の宗源を開きてその論理を明らかに
示すものなり、是を章の第一とす

仲尼問居曾子侍坐

の曾子、御傍に侍坐す。これなり。〇仲尼ハ聖人の御字
なり、後の世にたり、天子尊崇ありて、之を御と
孔子とせり。奉まつる、聖人なり。曾子の由来ハ
論語餘師に委細にせり。略しぬ。

子曰參先王有至德要道以訓天下
民用和睦上下怨亡知之乎

孝經開宗明誼章第一

群鳥堂梓

之を知乎と
くうよむべし

曾子席を辟て
曰く・参不敏さう
何を以て之を知
よ足人乎

子曰夫孝徳之
本也教之繇也
生むる所から復
坐せよ吾女に語人

身體髮膚之を
父母に受・敢て
毀傷せざるは孝

之始也

身を立・道を行
ふ・名を後世
に揚て以て父
母を顯は孝之
終らう於助字
とてよむべし

孝系

聖人をたずねて子とせりとなす奉まつる、
曰ありけり、先代の王至極の御徳を以て人間服膺の道
を天下の万民に訓やせり、
承知りて下怨を以てその御意たり

曾子辟席曰参不敏何足以知之乎

子曰夫孝徳之本也教之所繇也

生也復坐吾語女

身體髮膚受之父母不敢
毀傷せざるは孝

毀傷孝之始也

身を高く欲を起し、巧を作し、争を
をりて、怨來るる身体ハ髮鬚一毛の膚も、父母
より受りてきたれば、我身といふも是は傷つけ、又ハ
名を毀さふといふハ不孝なり、孟子ハ説き、
なる人も生むる始ハ性也、悪は心ならず、
人といふも、若他人より親を辱め、
怨をむくゆら心ならず、
事をおいして、高き陵よハの、
孝行の始は、
於後世以顯父母孝之終也

孝経

二

詳義堂評

夫孝ハ親ニ事
事始シ君
身を立ニ終
於助字カス

大雅小云ク再
の祖を念亡人
や其徳を聿
天子の章
弟二

子曰マシク親
愛スル者ハ敢
人ヲ悪マシ
親ヲ敬スル者
ハ敢テ人ヲ慢
ズシ不
愛敬親ニ事
スル盡ス然
後徳教百姓
ニ加ク四海
刑ス蓋天子
之孝カス

の終を善とす 夫孝始於事親中於事君

終於立身 終於立身 終於立身

大雅云亡念爾 大雅云亡念爾

祖聿脩其徳 祖聿脩其徳

天子章第二 天子章第二

天子章第二 天子章第二

天子章第二 天子章第二

天子章第二 天子章第二

天子章第二 天子章第二

子曰愛親者不敢惡於人敬親者不

敢慢於人 敢慢於人

愛敬盡於事親然後徳教加於

百姓刑於四海蓋天子之孝也

百姓刑於四海蓋天子之孝也

百姓刑於四海蓋天子之孝也

百姓刑於四海蓋天子之孝也

百姓刑於四海蓋天子之孝也

百姓刑於四海蓋天子之孝也

呂刑云一人有慶
民之賴

諸侯の章

第三

子曰居上不驕高而不危
節制度滿而不溢

考

慎しむと弟一たり、人よかりて、且國家の大

是寛大慎嚴と云ふ、呂刑云一人有慶

兆民賴之、身にたうれ慶御徳めき兆民の福

天子を奉まつる。兆と云ふは、數多き人との

諸侯章第三

諸侯一國の大名より、段

子曰居上不驕高而不危、人の上居て

制節謹度滿而不溢、節度は制するの

危くさるゝのたう、身を節度は制するの

心をつく謹しむ身を節度は制するの

高而不危所以長守貴也滿而不溢

所以長守富也、右のどく高不危は、

富貴不離其身然、富貴は身を離さず

後能保其社稷而和其民人蓋諸侯

之孝也、道を重しむるは、その徳

稷安穩は保つる、民相和して長久なり、蓋し諸侯の

好むるは、社稷を治りて、知なく、

詩云戰戰兢兢如臨深淵如履薄冰

考

詳

高而不危、所以長守貴也、滿而不溢、所以長守富也、富貴不離其身、然後能保其社稷而和其民人、蓋諸侯之孝也、詩云戰戰兢兢如臨深淵如履薄冰

高而不危、所以長守貴也、滿而不溢、所以長守富也、富貴不離其身、然後能保其社稷而和其民人、蓋諸侯之孝也、詩云戰戰兢兢如臨深淵如履薄冰

一人の事
士の章第五

子曰資於事父以事母其愛同
父以事君其敬同
故母其愛而取君其敬者取之兼之者也
故以孝事君則君以事君則

忠

忘情

子曰資於事父以事母其愛同

父以事君其敬同
故母其愛而取君其敬者取之兼之者也
故以孝事君則君以事君則

故母其愛而取君其敬者取之兼之者也

故以孝事君則君以事君則

君以事君則

君以事君則

君以事君則

忠
父母は孝行なる人の君は不忠ならずと

以弟事長則順
兄は長の道を弟は

忠順不失以事其上然

後能保其爵祿而守其祭祀蓋士之

孝也
忠順の心を失ふは、上の人

詩云夙夜寐忝爾所生

夙夜寐忝爾所生

夙夜寐忝爾所生

夙夜寐忝爾所生

孝

六

祥鶴堂梓

詩云夙夜寐忝爾所生

忠順不失以事其上然
後能保其爵祿而守其祭祀蓋士之孝也

庶人の章第一
子曰夫孝天子之時曰因

地之利也就

身を謹用と
節用を以て父
母を養ふ此
庶人之孝也

庶人章第六
庶人の心得べきの章なり

子曰因天之时
万の民の農業を以て第一とする
諸職入高貴ハタの同
つて世をとりとることを農業者は春田耕し夏草
を種つけをかりて秋ハ官の穡をり秋ハ
池ふ人等その外未年の用意をハワシハ
是を天の時節に因て施すとハワシハ

就地之利
地の利とハ水わりの田ハ縮をうゆ
嘆さたる土地ハ島とわりあるハ諸

節用以養父母此庶人之孝也
右の
はとの儉約をとり財宝の入用を節制し身と謹
しめて法度を犯さず上とる人を慢悔
とあるをうとるなりとて安んずる

父母を養ふなりとて安んずる

孝平の章
第七

子曰故自天子以下至於庶人
天子自以下庶
人至孝終
始亡して而
患不及不者未
之有未也ハ
助字未ハ兩度

孝平章第七
孝道ハ平くわくあるべし

子曰故自天子以下至於庶人孝亡

終始而患不及者未之有也
上ハ天子
下ハ

庶人より下は孝なきべし
始終を
とるなり
とて安んずる

三才章第八
天地と人を三才とす其

曾子曰甚哉孝之大也
曾子ハけりて

子曰夫孝天之經也地之

誼也民之行也
取王人
の式節
を二

經也地之誼也
人之行なひ也

天地之經よりして
而して民是よ
之は則とる

天之明は則とる
地之誼は因りて
天下の訓ゆ

是を以て其教
肅ま不して成
而して其政と
嚴か不して

万物を生じてめぐりて是永代不易の道なり
地は万物を養ふてその事の誼なり
人は仁義忠孝秉信としてついで天地之經
天地之經よりして道を行はるるは天地の經を則とる
天子父も天なりその徳は上り位して下を復めく
むのちなりたは臣と子ハ地なり是を以て

而民是則之
上下の民も天地の經を則とる
天子父も天なりその徳は上り位して下を復めく
むのちなりたは臣と子ハ地なり是を以て

則天之明因地之利以訓天下
上は高き方は下にして大地より天の非ざるを
監ぐて高き方は下にして大地より天の非ざるを
く固より仁を以て而して民は利潤を施さざる

是以其教不肅而成其政不嚴而治
聖王人ハ天地の如くその徳自然は身より行はるるは教
を以ておふなり是は肅め成して成就なる

而して治まる
先王教之を以て民
を化す可と見

是故之先
博愛を
以て而して民
其親を遺るを

莫
之を陳ぶん徳
誼を以て而し
て民行なひと

興
之は先づり敬
讓を以てを而
して民争ハ不

先王見教之可以化
嚴かに治りてその政道
く治りてその政道

民也
先王心よりその王ひてかくのどく
教は先王心よりその王ひてかくのどく

以博愛而民莫遺其親
是ゆへに聖王人身の
行はるるを以て先

陳之以徳誼而民興行
行はるるは人の
行はるるは人の

敬讓而民不爭
道之以禮樂而民和睦
争は依て民の交り
道は依て民の交り

示之以好惡而民知禁

詩云赫赫師尹民具爾瞻

子曰昔者明王之以孝治天下也

孝治章第九

不敢遺小國

公侯伯子男

之臣而況於公侯伯子男乎

故萬國之觀

萬國之歡心以事其先王

國者不敢侮

於鰥寡而況於士民乎

故得百姓之歡心
先君之事
家治者
敢於臣妾之心
況や妻子に於て
乎故は人之歡
心を得て以て其
親は事
夫然了故は生
ハ則は親之に安
人ト祭ハ則ハ
鬼之を享
是を以て天下和
平災害生ぜ不禍

故得百姓之歡心以事其先君百姓の歡喜有るを以て其の御祭に久く社御先祖の君との御祭に久く治家者
不敢失於臣妾之心而況於妻子乎
故得人之歡心以事其親家を治むるのハ理非
夫然故生則決斷の失念なく臣下婢妾の心を結ばざり況て子を教ゆるのと妻を服せしむるのハ節制
親安之祭則鬼享之親に久く事しハトナリ
是以天下和平災害不生禍亂子らりのかくのてくかたるが故は存へて親と時よくその祭を享るのみならず是子の孝心に依て

亂作ら不
故は明王之孝
以て天下を治
此の如
詩云く覺
德行有四國之
順
聖治の章
第十
曾子の曰く敢て
問聖人之德以て
孝に加ふと亡
乎
子曰く天地之
性人を貴と為
人之行たる孝

不作かくのどくりて天下安穩よく和平さる世の中潜くしてのち天の災害世の禍
故明王之以孝治天下也如此
明王之政道
詩云有覺德行四國順之直さう詩の心ハ上よのぐる如く徳の行さるをて四方の國民隨順歸るくせざるのみならず
聖治章第十聖人の治法孝の外は
曾子曰敢問聖人之德亡以加於孝乎曾子の外は加ふと問奉まらる聖人の徳子曰天
地之性人為貴人之行莫大於孝聖人のより天地阴阳二氣の合して生むるの性をわつたりその性の中より人より貴まるとの性

經 十 詳 鶴 堂 解

君子ハ從ガハ不
於也助字

君子ハ則ハ然

言道可と思ひ

行なひ樂しむ

可と思ひ

徳誼尊ぶ可

作事法と可

容止觀可進退

度ある可

以て其民は臨む

是を以て其民

畏て而して之と

愛之則として而

して之は象と

故能其徳教と

成て而して其政

令を行なふ

詩云く淑人君

子其儀忒不

紀孝行の章

弟十三

子弗從也 右説く、身は忠と孝

君子則不然 この理を以て元來君子

言思可道行思可樂 君子の言ハ

徳誼可尊作事可法 君子ハ

容止可觀進退可度 君子の容止ハ人それ

以臨其民是以其民畏而

愛之則而象之 有徳の君の位ハ立りて

故能成其徳 臨み、民を畏て之を

教而行其政令 以上徳を積て教を成、その

詩云淑人君子其儀不忒 人心なり、徳

紀孝行章第十三 孝行の作法がうん

子曰孝子之事親也 聖人かうして孝子の

居則致其敬養則致其樂 孝子の

致其樂 孝子の

其樂 孝子の

致其樂 孝子の

致其樂 孝子の

致其樂 孝子の

致其樂 孝子の

致其樂 孝子の

致其樂 孝子の

疾ハ則ハ其其憂ハ致ス之ヲ 喪ハ則ハ其其哀ハ致ス之ヲ 祭ハ則ハ其其嚴ハ致ス之ヲ 五五者者備備矣然後後能能親親之之事事 上上而而驕驕不不下下而而亂亂 醜醜而而爭爭則則兵兵 此此三三者者不不除除雖雖日日用用三三牲牲之之養養 莫莫大大於於不不孝孝

事事之之常常安安堵堵ををたたりりてて、樂まませせららるるをを以以てて養養ふふはは、孝子子のの心心かかくくああららるるはは、父母母のの疾疾ののああるる時時ハハ、心ををささししてて、喪ににああららるるはは、孝子子ハハ、父母母のの喪喪中中ニニああららるるはは、感ずずりりてて、祭ににああららるるはは、父母母のの在在りりにに如如くく、五者者備備矣然後後能能親親之之事事 上上而而驕驕不不下下而而亂亂 醜醜而而爭爭則則兵兵 此此三三者者不不除除雖雖日日用用三三牲牲之之養養 莫莫大大於於不不孝孝

驕驕ハハ則則兵兵 下下とと為為てて而而亂亂 醜醜ハハ則則兵兵 此此三三者者不不除除雖雖日日用用三三牲牲之之養養 莫莫大大於於不不孝孝

在在醜醜而而爭爭則則兵兵 驕驕ハハ則則兵兵 下下とと為為てて而而亂亂 醜醜ハハ則則兵兵 此此三三者者不不除除雖雖日日用用三三牲牲之之養養 莫莫大大於於不不孝孝

子子曰曰五五刑刑之之屬屬三三 孝孝之之大大莫莫大大於於不不孝孝

子子曰曰五五刑刑之之屬屬三三 孝孝之之大大莫莫大大於於不不孝孝

君を要する者

ある内々不孝の罪を

要君者亡上

右の外

ハ上を亡せ

是上を亡蔑するものころめるゆへなり

非聖

聖人を非ざる者ハ

人者亡法

法を破るるものなるゆへなり

親を亡せ

非孝者亡親

孝の道を非ざるもの此大亂

此大亂之道也

之道也

君を要し聖人を非る親を亡せざるに

廣要道の章

廣要道章第十五

廣要道の肝要あり

子曰民は親愛

子曰教民親愛莫善於孝

上より立つる孝

を教ゆるハ孝

道を行くハ下なる者なり習て

教民禮順

弟より善ハ

莫善於弟

上より立つる人なる弟を

風を移し俗を

義を重んじて順なる道

移風易俗莫善於

易ハ樂より

樂

世上の俗風をよめるハ移し易くハ樂

上を安し民を

安上治民莫善於禮

上安穩にして民能

治るハ礼より

禮

子細ハ礼義ハ尊卑高下の品をさし

禮ハ敬已而

禮者敬而已矣

敬はつて己をさし

故其父を敬

故敬其父則

外を依て敬己矣とハあり

説其兄を

子説敬其兄則弟説敬其君則臣説

弟説其君

弟説其君

この故は礼法のあるハ誠はあやうく

元々、暨不所亡

詩云、自東自西、自南自北、自思、服也、亡

廣揚名の章

弟十八

子曰、君子ハ親ニ事シテ孝・故ニ忠ニ君ニ移シテ可シ・兄ニ事テ弟・故ニ順・長ニ移シテ可シ・家ニ居テ理シ・故ニ治・官ニ移

德光四海、よわたりて、詩云、自東自西、自南

自北、亡思不服、詩の心ハ武王の孝心の御徳

四方よわたりて、天下の人々

廣揚名章第十八

子曰、君子事親孝、故忠可移於君

家よりついでて孝なる者ハ、官ニ移リて君ニ事スルこと

必ズ忠なりといふこと不孝なりとの忠あることを聞

事兄弟、故順可移於長、家よりついでて兄ニ

官、家を治むる理、人々を治むる官位、是以行成

於内而名立於後世矣

右の訓ハ、家を

國の外へもどこへともいふあり、之は依て

閨門章第十九

門内と閨あり

子曰、閨門之内、具禮矣乎

これ禮法ハ

親を具スル、弟一父ニ嚴重ニ

妻、子、臣、妾、繇、百姓、徒、役、也

敬するべし、次、子、臣、妾、繇、百姓、徒、役、也

妻より子へ子より臣僕婢妾へ、次、弟にめぐむ

諫争章第二十

時、依テハ、孝とす

諫争の章

弟二十

可シ・是を以て行カシム内ニ成テ而シテ名後世ニ立テ於矣

曾子の曰く夫慈愛龔敬安親揚名を安んずる名を揚る若し参命を聞て敢て問子父之命に従ふ孝と謂可多ん乎
子曰参は何の言そ與は何の言そ與言之通不邪
昔者天子に争臣七人有らば亡道なくと雖も天下を失ふ

曾子曰若夫慈愛龔敬安親揚名参聞命矣敢問子從父之命可謂孝乎
曾子がうて御問の禮かたはひは親を安堵かたはひは名を後の世よりとくはるを種々の御命に已まらけりぬ敢て御問に上るは子として父より孝と云ふ
子曰参は何言與は何言與言之不通邪
聖人御答のやハ参その方の中は何言をりかきくあるぞ何ゆゑ理を推致のこ
昔者天子有争臣七人雖亡道不失天下
昔者天子を諫言争するの官七人あり、二大臣と補弼の臣四人あり、天子の非を諫り過失を補弼とを司るなり、天子たゞ道を行ひ

諸侯は争臣五人有らば亡道なくと雖も其國を失ふ
大夫は争臣三人有らば亡道なくと雖も其家を失ふ
士は争友有らば則ち身不離於令名を離れ不於
父は争子有らば則ち身不誼に陥り不於

能諫はまろくは天子安穩を諫は逆多ハ滅亡はあやぶ、此七人の臣あるをりつと大抵亡道のとらうと雖も諸侯有争臣五人雖亡道不失其國
諸侯の家は諫争の臣五人あり、亡道なくと雖も國を失ふ
大夫有争臣三人雖亡道不失其家
大夫の家は諫争の臣三人あり、亡道なくと雖も其家を失ふ
士有争友則身不離於令名
今日諸士の交接は信を守善を責くの人あり、過失亡道あるは諫争とある所はまろくは、惡名なく令名を父有争子則身不陷於不誼
父子の道ハ孝順を以て事、幾つと諫む

故上下能相親

過失をさぐり救く故上下能相親也

詩云心乎愛矣遐不謂矣

君臣上下むつまじくしてのち、民感涙をかみりて、君に幸福を、詩云心乎愛矣、遐不謂矣

忠心の心を臧

詩の心は忠にして信實、心は君を愛敬する、忠、心臧之何日忘之

喪親の章

喪親章第二十二、西親の喪中の

子曰孝子之親

子曰孝子之喪親也、哭不依、禮亡容

不禮容亡

孝子の親の喪あるハ、之を思ふハ、哭不依、禮をさぐるハ、心の心を、禮法容なくハ、是なり

言不文服美不安

言不文、服美不安、聞樂不樂、食旨不

甘此哀戚之情也

甘此哀戚之情也、孝子の心ハ悲哀、言不文、服美不安、聞樂不樂、食旨不

三日而食教民亡

三日而食、教民亡、以死傷生也

也

以死傷生也、古者父母死、哀戚のあり、

毀て性を滅

毀て性を滅、三日の後ハ、食、事、

不此聖人之正也
三年之過不
示民終有也

之棺椁衣食
其簠簋而哀戚之

滅性此聖人之正也

三年示民有終也

為之棺椁衣食以舉之

陳其簠簋而哀戚之

哭泣擗踊哀人

踊哀以送之卜其宅兆而安措之

之宗廟以為

鬼享之春秋祭祀以時思之

生事愛敬死

事哀戚

羊鳥堂

生民之本盡
死生之誼備
孝子之事終
矣助字なり

哀戚を尽すべしなり
生民之本盡矣
死生之誼備矣
孝子之事終矣
死に事するの礼誼
備なりとの事
右の如くよく事終る、誠一人たるもの此書と
よき、此事を知むんバ一日も立たざるべしとの事なり
百拜、而譯スト
焉云再

孝經 終

大坂書林森本文金堂藏板目錄 心齋橋唐物町 河内屋太助	五經大字 道春点再刻 全十册	四書安永板 道春点 全十册	武備志 明茅止生著 全十册	事文類聚 全百册	大明一統志 全六十册	小雲樓稿 大典禪師詩 丈尺腕ホヲ集ム 全六册	徂徠集 詩丈尺腕ホヲ アム 全二十册	金華文集 平子和先生著 全四册	女七才詩集 小本 全一册
七才子詩集 小本 全一册	同 掌故 勢州中條中即著 全三册	同 註解 全三册	同 國字解 全三册	同 七律解 全三册	同 三ノ解 三册 七子近体詩 二册	同 澤說 一册 同 芥芥集 二册	同 七子傳 一册 同 正考 一册		

江村銷夏錄 清高士奇著 全六册

此書ハ晋唐以来古人ノ各画ノ卷軸絹紙ニテ尺印
畫上ニテ出ス各画ヲ玩ブ好事ノ人ハ必ス見ルベキ珍本也

白石先生鬼神論 新井筑後守著 全二册

コノ各ハ經史子集ニモタル鬼神ノ説ヲアゲテ得失ヲ論
ビ明白ニトケリ古今鬼神ノ此各ヲ三六掌ヲカスガコトシ

子華子 全二册

鬼谷子 全二册

書翰指南抄 蒙所先生書 全一册

コノ各ハ吾邦各箇ノ文体ニワキニ真字ヲ付各カ
ノ文字ヲ首ニシルニ初心ノ人文章ヲ習フノ便トナス

新刻蒙求國字辨 東山著 全六册

古文眞寶 大字再刻 全二册

發蒙書東式 小宮山君延著 全三册

此各ハ五節句平生尊卑贊用ニ用テ尺牘各東ノ式
法ヲ圖テ委クオヒ童學ニカキテ平日見ルベキ各ナリ

唐明詠物詩類函 角有則編 全五册

此各ハ唐明名家ノ詩ヲ部分ニテ廣クアツテ旅中席
上ホ作例ノ急用ニツケルヲ各ニサレル重宝ナリ

詩學熟字小笈 小本 全一册

韻會字引 全一册

唐音和鮮 全二册

鐸玉韻府 全光册

王氏詠物詩選 王長興著 全三册

此各ハ五代ノ間名家ノ詩ヲ部分ニテオヒレキヲエラ
ベリ詩人作例ノ正キヲ用ニト欲セハ是ニスキタルモノナレ

四声韻會玉篇大全 大本全二册

此書ハ古今韵會小補韵會ノ文字ヲアツ
メテ畫引ニシトトク平上去入ノ四声ヲワ

カ千字ノ左右ニ卷付了付ヲナレ下ニ音訓ヲ
委ク注シ初學トイヘ知ヤスカラレム

日本名勝詩選 学半塾輯 小本全二册

此書ハ日本六十餘州名所古跡ホノ遊覽
ト送別トノ詩ヲ多クアツム三十名家ノ作也

且鮮シカタキハ注ヲ加ヘ古事古名ヲツヒラカニ
シ學者遊行吟咏ノタヨリ此ニスキルモノナリ

歷朝名家詩話 附詩問 小本二册

此書ハ宋元明コノカタノ諸名家ノ詩話
ヲコトクク集メ初心トイヘ尺詩ヲ作ルノ

心得ニナル又清ノ刘大勤カ問ニ玉漁洋カ答
ノ作詩ノアリ共ニ詩人ノヨムキノ書ナリ

小學正文 片假名付 大本二册

初學作文圖牋 川合襄平著 折本一册

此書ハ初學ノ士文ヲ作ル手段ヲサトリ易カラシメタメニ
古文ヲ以テ文法ヲ示ス此圖ヲ見ハ直ニ會得スルナリ

南海先生詩訣 祇南海著 大本一册

此書ハ先生カクテ門人ト詩作ノコト語シテ
側ヨリ筆記セシ也詩人必ヨムベキ書ナリ

武用辨畧 洛東木下義俊輯 全八册

此書ハ武家ニ專ラ入用ノコトヲアツム天時因府ヨリ城郭
武兵弓矢甲冑鷹犬ニテ故事作法ヲ著ス必ヨムベキ各也

本朝武林原始 日夏繁高著 全七册

此書ハ武家ノ事物ノ起源故事ヲ明カセリ三卷五国
史ヲ始メ小史稗説ニ至ルニテ本拠ト為ベキハ皆トレリ

武用宝鑑 全六册

古注 四書字引大成 小本二册

翻刻隸續

宋洪景伯先生著 箱入 全四冊

此書ハ凡ソ漢魏晉ノ碑碣石經儀礼左傳ノ遺文石關神道ノ題字宅舍墟墓ノ甍石羊石虎ノ刻テアツメサル者ナレニテ圖象アリ実ニ雅人座右ノ展玩是ニズギタル楽ナレ

平天儀圖

彩色搨 一帖

同圖解

合本箱入一冊

コノ書ハ天体ノ圖ヲ詳カニ五色ヲ以テ彩トリ又圖解一冊ヲソテ學者サトリヤスカラレム

天學指要

西村遠里著 全四冊

此書ハ天文学ノ奥旨ヲ国字^{カナ}ニテクハシクトケリ 初学必ヨムベキノ書ナリ

孫子經典餘師

溪百年著 全三冊

コノ書ハ平カナニテ分リヤスク注セリ一タヒ此ヲヨム者ハ直ニ兵法ノオモムキヲ會得スルナリ

為學初問

周南先生著 平カナ 全三冊

コノ書ハ道理ノ根本學問ノ淵源儒仙神ノ旨ヨリ和漢ノ真寔諸儒ノ得失ナトヲクハシク論シ又自己ノ意ヲ述テ發明スルヲトケリ大ニ初学ノ惑ヲトクノ書ナリ

橘庵詩鈔

全三冊

胡蝶庵隨筆

全一冊

列子國字解

全四冊

肉蒲團

全五冊

此書ハ唐土ニ未央生ト云少年アリ好色ノ多天下ヲ游行シ美女淫婦ト種々ノ奇合有シテ面白クシルス

世說系譜

柚木太玄著 全三冊

袖珍韻鏡

中本一冊

Handwritten notes and signatures at the bottom left of the page.

